

平成18年度若手の会

お世話役 長寿医療工学研究部

平成18年度のNILS若手研究発表会が、8月29日（火曜日）の朝9時30分～午後の5時まで、研究所2階会議室にて開催された。

開催時間も昨年より延長され、参加演題数も昨年をやや上回る26演題となり、会議室の展示スペースが不足する勢いであった。

午前9時30分、柳澤副所長の開会宣言を合図に、演者はプロジェクターを用いて、各自の研究内容を3分間で聴衆にプレゼンテーションを行った。発表時間は、3分間という短い時間にも関わらず、動画・アニメーションの使用や、図表のポップアップなど、聴衆への視覚的な効果を考えた工夫も多く見受けられ、技術的にも高い水準であった。

3分間プレゼンテーションでは、聴衆から、“演題の全体像が把握できた。ポスターセッションでの議論に円滑に移行できた。”などの意見が多く出され、また、発表演者からも、“練習になった。アピールできた。”という声が聞かれた。この新しい試みは、双方から好意的に受け入れられたようである。

お昼休みを挟んで、13時から、昨年と同様に、「ポスター展示&討論」のセッションが始まった。ポスター展示は、色彩や写真、図の配置などに工夫を凝らしたものが多く、昨年と比較してカラフルになり、見る者への訴えかけも強力になってきた。ほとんどのポスター展示の前には、多くの人だかりが自然と形成され、質問する側、説明する人の間で熱心な討論が繰り広げられた。

国立長寿医療センター研究所が、フルスタッフを擁して1年足らずであるが、昨年と比較して、徐々に研究が根付いてきた様子が見て取れ、今後の研究内容の広がりや深化に大いに期待できるという印象を与えた。研究発表内容は、老化、老年病に関する研究、再生再建医学に関する研究、脳機能に関する研究、看護・介護予防に関する研究、医療工学的研究など多種多様を極めた。異なる研究分野の若手研究者が、互いに啓発し合うことにより、新たな発想や活力が育まれると考えられる。

大島総長からは、「高齢社会を向かえて国立長寿医療センターに対する期待が益々高まっており、各自が豊かな長寿医療社会の実現を目指して一層の努力をして欲しい」とのお話があった。また、田平研究所長からは、「研究内容もバラエティに富み、その内容も一段と進歩してきている。長寿医療センターの使命を、なお一層自覚して、飛躍を遂げて欲しい」とのお言葉を頂いた。最後に、参加者による投票結果に基づき、最優秀賞「再生再建医学研究部」、優秀賞「血管性認知症研究部」、そして、優秀奨励賞が「長寿医療工学研究部」の若手研究者に授与され、さらなる発展を期待して若手の会の幕を閉じた。